

## 共同研究プロジェクト「タイ文化圏における山地民の歴史的研究」2008年度第3回研究会

日時 2008年10月18日(土) 午後13:00~18:00

場所: AA研マルチメディアセミナー室(306)

報告:

1. 「叢書: 知られざるアジアの言語文化について」

共同研究員全員参加

2. 立石謙次氏 (青山学院大学非常勤講師)

『南詔図伝』からみた後期南詔国一梵僧観音伝説と王権

3. 山田勅之氏 (神戸大学大学院)

「明代の雲南麗江ナシ族・木氏土司の対外拡張とその意義—中華世界とチベット世界の狭間で—」

4. 新谷忠彦氏 (AA研所員)

「言語学、歴史学、文化人類学の接点を探る」

### 研究会開催の趣旨

タイ文化圏は、北は中華世界とチベット世界に、南はシャムとミャンマーを中心とする東南アジア大陸部世界に連続しており、長い歴史の中で南北双方からさまざまな影響を大きく受けてきた。雲南産の普洱茶がキャラバン隊によってチベット文化圏へ運搬され、チベット人の生活に欠かせないバター茶の原料を供給するようになったことは、亜熱帯のタイ文化圏が乾燥寒冷気候に居住するチベット人の生活を支えていた具体例としてよく知られている。

これまで研究会ではタイ文化圏の北側の政権を取り上げてこなかった。8世紀半ば~13世紀半ば、雲南を統治した南詔国・大理国は、ピュー(驃国)と並んでタイ文化圏と最初に接した王朝であると推定される。また、14世紀以降、山地民とタイ系民族はひとしく中国王朝から土司制度によって間接統治されてきた。この度の研究会では、南詔国と中華世界がタイ文化圏の山地民に対して布置した制度の参照事例として、南詔国と麗江ナシ族土司に関する発表を設定した。さらに、総括として新谷忠彦所員に、学際的な視点からタイ文化圏の山地民に対する最新の見方を披露して頂いた。(唐立)

### 報告の要旨

1. 『叢書: 知られざるアジアの言語文化』について

先ず、本共同研究プロジェクトの成果普及活動として本年度刊行する予定の本叢書第三巻『スガンリの記憶—中国雲南省ワ族の口頭伝承』の完成原稿について担当者の山田敦士共同研究員から報告があった。次に、ダニエルスは本プロジェクトの成果普及活動とし

て2009年5月に開催予定の「タイ文化圏教育プログラム」について説明し、主査と副査以外にも園江満、長谷千代子、山田敦士三氏の共同研究員も教師として参加する旨を報告した。この件に関する討論では、共同研究員から受講者対象は院生・若手研究者のみならず、学部生を含むべきだなどの意見が出された。(唐立)

## 2. 『南詔図伝』からみた後期南詔国—梵僧観音伝説と王権

南詔国後半から大理国時代(9世紀中頃～13世紀中頃)にかけての雲南地方では、支配層の間に仏教が広く信仰され、国教の地位を得ていたとされる。このことはこれまでの諸研究によって指摘されてきた。ただし問題は、この仏教及びその周辺の宗教的世界観が南詔蒙氏の王権思想及びその支配とどのようにかかわっているかである。

本発表では、南詔国末期にあたる899年に制作された『南詔図伝』の内容を手がかりに、南詔国後半期における王権思想とそこよりみいだされる歴史背景、特に周辺民族集団との関係について考察した。

また、この王権思想は南詔国・大理国という王朝が滅びた後、現代中国の少数民族の一つである白族にまで受け継がれることになる。これら王権思想がどのようにして受け継がれ、そしてどのような意味合いに変化していったかということについて、雲南の大理にある聖源寺で、清・康熙四五年(1706)に作られた『白国因由』を中心に考察した。

『南詔図伝』は、南詔国への仏教の伝来と梵僧の南詔王室への授記及び、それによる南詔王室の帰依とその後の王業が成就することを主題としている。しかし、この梵僧の伝教譚は実際の歴史ではなく、始祖としての細奴邏・邏盛の権威を高めるため、後世にこの二人の時代に遡らせて創作し、その後の南詔国の雲南支配およびその過程である南方経営と他民族支配とを観音に結びつけて正当化したものである。

また『南詔図伝』には、梵僧が各地の非仏教徒を次々と教化していく内容がみられた。この阿嵯耶観音を建国の象徴とみるならば、梵僧による教化とは、すなわち南詔国による周辺民族集団支配を示していると考えられる。つまり南詔国は、中国系仏教という中国的文化装置を取り入れつつも、そこから独自の支配原理を創り上げ、しかもその概念は、大理国にも継承されたと考えられる。

南詔国・大理国が滅亡した後、この『南詔図伝』の観音による教化譚は、元・明代に至っても、なお雲南地方の民間で保持されていた。そして清代に至り、『白国因由』によってこれら諸信仰は、ひとつの一貫した物語として整理された。これにより、清代初期の大理地方で、これら諸信仰を基礎として「白国」という概念が確立し、その後現在にいたるまで、その意識は何らかの形で現代白族の間に受け継がれていると考えられる。(立石謙次)

## 3. 「明代の雲南麗江ナシ族・木氏土司の対外拡張とその意義—中華世界とチベット世界の狭間で—」

明代の木氏土司は天順期(15世紀中葉)以降、チベット人居住地域(中甸、維西、徳欽、

パタン、リタン、ムリ) や明朝から見て同じ土司支配地域である雲南・永寧府や四川・塩井衛などを占領し統治下に置いていた。これらの行為について、木氏土司は明朝の「藩屏」であると記録されていることが多い。従来の研究もそのような記載を根拠にして、明朝と木氏土司の関係を支配・被支配の関係と規定しているものがほとんどである。

本発表では、木氏土司の軍事行動と占領後の統治の状況を明らかにし、それらに対する明朝とチベット側の認識や対応を検討し、さらにその対外拡張が持つ意義を考察したい。

まず、チベット人居住地域への軍事行動のうち、チベット語史料が残るムリ地方の場合について分析した。そこからチベット側から見ると、単なる軍事的統治者というだけではなく、チベット仏教カルマ派の擁護者として認識されていたことを示した。次に、永寧府と塩井衛への軍事行動について、以下のような指摘を行った。明朝は嘉靖 14 年に麗江府と永寧府、塩井衛 3 者の間に入って領土争いの調停を行ったが、その後木氏土司がこの調停を遵守することはなく、却って永寧府と塩井衛のほとんどを占領するに至った。ところが、木氏土司は明朝から譴責されることはなかった。他方、明朝はチベットとの間に紛争が絶えることがなく、そのためチベット攻撃という点で木氏土司と利害が一致するところとなっていた。そして、その利害の一致ゆえに永寧府や塩井衛の占領が黙殺されたと考えられる。つまり、木氏土司と中華世界との間には相互依存の関係が成立していたと考えられる。

このような木氏土司と中華世界及びチベット世界との関係は、一世代のみの事象ではなく、世代を継承してなされてきたのである。このことは、明代を通じて麗江・木氏土司が政治権力の自主的な運用と社会秩序維持の能力を発揮していたことを示していると考えられる。(山田勅之)

#### 4. 「言語学、歴史学、文化人類学の接点を探る」

言語には必ず複数の話し手があり、背景に話し手の社会・文化があって、それが必ず言語に反映されているはずである。一方、伝統的「言語学」はしばしばこのことに無頓着で、話し手から離れた機械的な言語分析に偏りがちである。人間の行動を研究対象とする点に関しては言語学も歴史学も文化人類学も同じであり、この点に着目することによって言語学を超えた幅広い学際研究が可能となるはずである。

文字文化を持たなかった民族の過去を知るための資料として、これまで使われていたのは文字を持つ民族が書き残した文献資料、考古学的資料、口頭伝承などであるが、これらはいずれも客観性に疑問の余地があり、また量としても十分ではない。一方、言語資料については、単語や文の構造や構成は基本的に意図的に作られたものではなく、また量的にも豊富(無限)である。こうした特徴を持つ言語資料を、従来から使われている方法に加えることによって、より明確な形で文字文化を持たなかった民族の過去を知る新しい方法が開ける可能性がある。

言語資料を無文字社会の過去を知るために使う方法としては、先ず、歴史音韻論の方法を使うことによって言語音変化の年代を推定し、借用語の音変化を検討することで民族

間の接触関係を知ることが可能である。その際には地域的な音変化の分布も参考になる。また、言語は連続的な意味領域を非連続的な単語の組み合わせで表現していることから、特定の意味領域をどのような単語の組み合わせで表現しているかを調べることによって、その言語の話し手の意識構造が分かり、そうした構造を異民族間で比較検討することによって、異なる民族間の関係を明らかにすることが可能である。

本発表は、特に鶏の例を中心に、異なる民族間で野生種と飼育種の違いをどのように認識しているかを明らかにし、更には、そのほかの動物や植物について異民族間でどのような表現の違いがあるかを幅広く検討することで、歴史学や文化人類学との接点を見出そうとする試みである。(新谷忠彦)

## 5. 質疑応答

各発表について活発な質疑応答が行われた。立石氏発表については、南詔・大理王国と東南アジア王朝との関係、雲南の梵僧伝説とチャンパのバラモン僧の類似性や白人の撰による漢文史料の白語読みなどに質問が集中した。山田氏の発表では木氏政権の勢力拡張と宗教が強調されたこともあり、木氏がそもそも何故中国の土司制度を受け入れたか、木氏の木里に対する支配の在り方、また木氏がチベット仏教を用いて世俗的な政権を正当化することなどについて活発な議論が交わされた。(唐立)